

「前田利家」のこと

内藤 賦一

この一月よりNHK大河ドラマ「豊臣兄弟」放映中なり。尾張の農民出身たる藤吉郎秀吉と小一郎秀長の兄弟、強き絆にて奇蹟ともいふべき天下取りの偉業成し遂げたる世上みな知る物語なり。

我、テレビドラマの歴史物いたく好みぬ。就中、NHK大河ドラマの初回昭和三十八年放映せられたる「花の生涯」より、今回「豊臣兄弟」迄缺かさず觀て居り。各ドラマの筋書き誰もが知る英雄譚の類ひなれば、結末に意外性尠く安心して觀るを得といふ處、すなはち我が性格に合ふに非ずや。

此のドラマ最近の場面にて、信長の家來として藤吉郎驅出しの頃、擊劍の御前試合ありて藤吉郎同じく若き前田利家と試合し、強烈なる槍裁きなる利家にこつびどく打ちのめされたり。其の後兩人は隣同士の家族付合いすることなれど、今回語らんとするはその前田利家にまつはる話なり。

言はずもがな、前田利家は織田信長の古來の麾下として數知れぬ戰鬪に参加、血氣盛んなる猛將として信長より樞要なる地位與へらる。又、續く關白秀吉よりも厚き信賴得て五大老の筆頭としてその政權支へ加賀百萬石を興すに至る。加へて、その加賀前田家は江戸時代を經て近代に至る迄榮えたり。あの激越なる戰國時代にありて暈の上にて命全うせる利家はまさしく「戰國の成功人」の一人とも言ふべし。此の邊は昔より廣く人口に膾炙せる處なり。更に、平成十四年には例の大河ドラマ「利家とまつ・加賀百萬石物語」放映せられ、利家を唐澤壽明、まつを松嶋奈々子演じ一般の好評得て、利家の男らしく逞しきイメージ定著せり。

我、物心つきし頃より、加賀なる石川縣が我が生地福井の隣縣なる誼みに加へ、漫畫・小説を通じ前田利家に好感情抱けり。更に長じて、我、福井縣越前市（かつて古代に國府置かれし由縁にて府中と稱せり）に利家深く關はりたる歴史的事實を知れり。曰く、天正期當時加賀・越前にて猛威揮ひし一向一揆制壓の爲置かれたる府中城の主將として、利家は信長より府中三萬三千石與へられ我が府中を數年間治めたりといふ。現在府中城址に越前市役所建てり。又、越前市内さる寺院に、利家其の父母供養の爲納めたる石塔現存せりとの由。後年江戸時代には、加賀藩前田の殿様參勤交代にて北陸街道東上する途次、此の府中の寺に寄りて石塔に拜禮せしとの事。

我、斯かる話知りて、利家に益々親しみ抱き居りぬ。

而して随分後年、斯くの如く我が英雄なる前田利家につき、我が驚愕すべき事實知りぬ。偶と購入せし郷土歴史書「たけふ歴史探望」（武生は越前市の舊稱なり）讀みし折り、利家の實像に迫る記述發見せり。

其は、「小丸城址にて發掘せられし瓦文書（かはらもんじょ）」なるものなり。

昭和七年、越前市東方なる味眞野地區に在る小丸城址を調査の折り發掘せられし丸瓦に次のやうな一文刻まれて有りといふ。文中なる前田又左衛門は彼の前田利家ならん。（一）内、著者記す。

「此書物（かきもの）後世に御らん（覽）じられ 御物かたり（語）可有候

然者（しかれば）五月廿四日 いき（一揆）おこり 其のまま

前田又左衛門殿 いき千人ばかり いけとり（生捕り）させられ候也

御せいはい（成敗）はりつけ（磔）かま（釜）にいられあふられ候哉

如此候 一ふて（筆）書きとどめ候」

多分、當時近隣なる一向一揆方の者利家の殘酷なる處刑の有様に憤激し告發せる一文が五百年近くを経て姿見せたるものならん。

あまりの生々しさと處刑の苛酷さに、我、思はず絶句し慄然せるを覺ゆ。

此の小丸城址、學校の遠足にて訪れし記憶あり。その折には古き城跡の印象あれど、瓦文書の説明など欠片も無かりき。此の發掘戦前の事なれば既に斯界に知れ渡りたる筈なれば、せめて社會科の教師我等に教へて呉ればやと思ふも後の祭りなり。

日本史の戰國時代につき習ひたる内、織田信長の比叡山焼討ちに於る僧俗三千人の殺戮、長島一揆攻め或いは城攻め等の殘忍なる仕打ちの事知りたるが、彼の「好漢」前田利家と結びつけて考ふる事まるで失念せるは、我誠に迂闊ならんと今更ながら反省す。抑と、前田利家は其の信長の麾下に在りて此れ等の戰鬪を凡そ指揮する武將そのものにては無かりし乎。

思へば、あの頃全國的に蔓延せし一向一揆、十五世紀末頃より天正年間にかけ凡そ百年の長きに亘り各地戰國大名悩ましめたり。就中、加賀一向一揆は加賀越前の本願寺門徒中心とし此れに國人武士及び農民卷込む大勢力となり、加賀守護富樫氏を滅亡せしめたるに至りては前代未聞なる有様なりき。

全國制覇に撃つて出でし織田信長にとりて北陸の入り口に盤踞せる一揆勢は何としても殲滅すべき仇敵ならん。斯かる信長の幕下にありて其の戰鬪の眞正面にて働かし利家が強大

なる敵を討伐するに當りあらゆる手段を用ゐ、時には殘虐陰慘なる所業も厭はざりし事想像に難きものに非ず。

かと言ひて此の瓦文書にある如き所業を是とするには非ず。ただ、我が歴史の事象を知り考へ評するに當り心掛くべきは何か、といふ課題は残れり。歴史の實像たるもの、政治經濟體制は長き時間經て變遷せるものか、當り前の事ながら改めて身に沁むる話なり。

以上

(令和八年二月十三日受附)